

(研究ノート)

ラビンドラナート=タゴールにとって のアフリカ——アフリカ観・南アフリカ・エチオピア戦争

岡 倉 登 志

はじめに

近年、私は日本-エチオピア関係史と第二次イタリア-エチオピア戦争（日本では単にエチオピア戦争と呼ぶことが多い）を研究課題としており、『駿台史学』80号に論文を、アフリカ学会機関誌『アフリカ研究』37号に研究ノートを発表している。『東洋研究』122号にも大アジア主義者のエチオピア戦争への関わり方を中心に小論文を発表し、そのなかでインドの民族主義者ビハリ=ボースが黒龍会のメンバーたちと行動をともにし、大亜細亜協会インド支部あるいはインド国民会議日本支部メンバーとして活動していたことを紹介したが、インドでイギリス当局につけ狙われていた過激派のビハリ=ボースは、ひとりのインド人の助力なしには来日できなかった。アジアで最初にノーベル（文学）賞を受賞しているインドの詩人にして哲学者ラビンドラナート=タゴールこそが彼の来日を可能にした。この点についてボース自身は、「タゴールは自分を親戚として日本旅行に同行させてくれた。自分はP.M. タゴールと名乗った」と書いて⁽¹⁾いる。

ところで、ラビンドラナート=タゴール〔以下ではタゴールとのみ表記〕が東洋に関心を抱く契機を与えたのは、私の曾祖父天心であり、1916年のタゴールの初来日の目的には、天心の墓参りも含まれていた。こうし

た私的な関係のみならず、タゴールの国際主義者としての活動とその思想にかねがね関心をもっていたので、この際タゴールがアフリカにどんな関心を抱いていたのか、あるいは関心をもっていなかったのかを少し調べてみようと思い立った。したがって、このノートは、メモ程度のレベルにすぎない部分がほとんどであるが、アフリカ研究にとっての新分野であるとともにタゴール研究でも新開拓の分野であると考え、発表に踏み切った。

1. タゴールにとってのアフリカ

西欧型知識人のアフリカ観か

タゴールが言及しているアフリカは、中央アフリカ、コンゴ、南アフリカ、エチオピアなどである。中央アフリカについての言及は、「日本紀行」のなかで日本人が混血種であるために多様な気質の激突によって心を絶えず動かして進歩したとの日本人論との対比で、いわば未開・野蛮の典型例としてのものである。

「純粋な種族を見たいと思うならば、蛮族のところに行かなければならない。彼らは狭い避難所に隠れ潜んで、自分たちの種族を隔離する。そのために、オーストラリアの原住民は、いまなお原始のままであり、中央アフリカでは時の流れが止まっていると言われている」⁽³⁾。

これだけの記述からタゴールのアフリカ観—広大なアフリカ大陸を一括することにはそもそも限界があるのであるが、タゴールの同時代では一括して考えていたと思う—を断定的に述べることはできないが、西欧型知識人のアフリカ観、いいかえれば社会進化論的な文明観を共有していると言えよう。もちろん、ハーバート＝スペンサーの影響を受けていた⁽⁴⁾ 福沢諭吉が『文明論之概略』で言及したような露骨な人間階梯の図式と

しては示されていないが、引用文のすぐ後に「ところが、ギリシャは、一方はアジア、一方はエジプト、一方はヨーロッパ大陸に接するところに位置し、それによって刺激を受けてきた。ギリシャ人は純血種ではなかった。ローマ人も同様である。インドでも、非アーリア人とアーリア人とのあいだに混血が行われていたことは、疑いがない」と述べている。

アフリカ人にもいろいろな民族があり、混血民族も多く、異なる民族が互いに刺激しあうことによって文明が形成されるというタゴールの見解は、一方ではアフリカにおける独自の文明、文化の容認につながる可能性を多く含んでいるが、少なくとも「日本紀行」を著した1910年代にタゴールがもしアフリカ社会についての情報を集めたとしても、その源が主にタイラー流のイギリス人類学であったならばおのずと限界があった。

また、「中央アフリカでは時の流れが止まっていると言われている」との一文から、タゴールのアフリカ観を西欧型知識人のそれと同類とはいえないと思う。一例を挙げれば、いわばこの見方を鏡に映したものとして1920年代の南太平洋のサモアの知的な青年“酋長”ツイアビの「白人には時間(余裕)がない」というヨーロッパ文明に対する批判(『パパラギ』参照)にも見られる。

コンゴについては、自由を何よりも貴び、人間抑圧と戦うヒューマニストの立場からコンゴに関心をもったとの断片的な記述⁽⁵⁾を見ただけなので推測であるが、20世紀初頭のレオポルト2世によるコンゴ(1997年までザイールという国名)での残酷な統治に対してマーク=トウェインやコナン=ドイルのような英米の作家のように抗議の声を発したり、詩作をしたのではなかろうか。この点についてはまったくデータがないがキリスト教とかヒンズー教とか、イスラーム教とか、仏教とか宗教にかかわらず、文字どおりの人間愛=ヒューマニズムの立場から発言した

ことには間違いないが、インド国内でのベンガル分割反対闘争の展開とかナタールのインド人問題、さらには日露戦争などにタゴールは、より強い関心をもっていて、コンゴ問題にはさほど関与しなかったのではなかろうか。そしていくら国際主義者とはいえ、より身近な問題に肩入れするのはしごく当然ではなかろうか。

タゴールとシュヴァイツァーとの交流は、主として哲学的や宗教などをめぐる論争であったが、⁽⁶⁾両名の書簡を丹念に読んでいけば、アフリカに関しての意見交換もみつけられるかもしれない。いずれにせよ、これも今後の課題として残される。要するに、現時点である程度のまとまった言及の出来るのは南アフリカとエチオピアに関してである。

2. タゴールと南アフリカ

人種問題への関心

三年前にロンドンで買い求めたインドとイギリスの研究者の共著である詳細で興味深い『タゴール伝』⁽⁷⁾と『タゴール著作集』がこの小論の主な参考文献であるが、前者に掲載されている数枚の写真の中にガンジーの南アフリカ時代のふたりの親友が写っている。すなわち、イギリス人の弁護士 C.F. アンドリュースと W.W. ピアースンの二人(ロマン=ロランは1940年にアンドリュースが逝去したときにこの両名の業績を絶賛している)である。二人は1913年にタゴール邸のゲストとして滞在したし、ピアースンがタゴールの日本旅行に随行したことは岡倉天心に^{ゆかり}縁の地である茨城県の五浦で写された写真によって明白であるし、新聞記事や伝記からはアンドリュースも同行していたことが分かっている。

タゴールと二人のイギリス人弁護士(時にはガンジーも加わったであろう)は、インドの民族運動やイギリスの情勢についての話題とともに

当然、南アフリカにおける人種問題や二人が関わったインド人の権利要求運動について話題にしたであろう。また、1896年に南アフリカから一時帰国したガンジーの「南アフリカ・インド人問題」をテーマとする講演活動に協力していたであろう。

ちなみに、1950年代にゴールド・コースト（独立後はガーナ）でエンクルマが展開した積極行動は、ガンジーが南アフリカ、そしてインドで試みたいいわゆる非暴力・不服従運動にならったものである。そして1920年代前半のタゴールは、西洋と東洋の文化の提携を説くという立場からガンジーの不服従（非協力）運動に疑問を提示していた。

タゴールは、1915年にはガンジーに頼まれ、南アフリカ（おそらくナタール）で生活して少し問題を抱えていた青少年20人のいわば躰や精神的な教育を引き受けたことがある。その仲介の労を執ったのがアンドリュースである。彼はインド滞在中にタゴールの学校の評判を聞いていたし、実際に見学していた。アンドリュースの手紙を読んだときにタゴールは、ガンジーの“子供たち”を批判し、受け入れに否定的な考えをもっていたが、数日後には「私は彼らの教育訓練システムについての懸念を払拭できませんが、子供たちはとても愛すべき子供たちだと思う」との返書を送っている⁽⁸⁾。

カルカッタから西へ160キロ余にあるシャンティニケトンにタゴールが設立した学校をタゴール自身は修道学園と呼んでいたが、日本語の「修道」という響きは、その教育理念とはいささか異なるイメージを与えている。1901年に開設された当初には古代賢者の草庵をおもわせた学校では、サンスクリットが教えられ、インドの伝統的な自然観とか人への思いやりも教えられていたが、青少年自身が創造の自己開発をできるように指導することに力点がおかれていた⁽⁹⁾。

ボーア（南アフリカ）戦争についての発言

インドは、本国イギリスが南アフリカのトランスヴァール共和国を植民地に組み込んで南アフリカ連邦を形成するために実施したボーア（南アフリカ）戦争にかかわった。1900年9月以降は特にそうであった。それは、「白人同士の戦いに有色人を動員するのはプライドにかかわる」として、また、「カナダやオーストラリア、ニュージーランドの自治領から白人を動員できる」と考えていたロバーツ最高司令官に代わって、そんな体裁にはこだわらないスーダンの英雄キッチナーが指揮を執ることになったからである。なお、ボーア戦争中のインド兵の役割に対する評価が別れるのは、戦争の前半と後半での戦略変化があったからであろう。また、イギリス史の専門家がインド人の役割を軽く見るのに対して、インドの専門家は重要視している。⁽¹⁰⁾

ちなみに、私の現在の見解は、中間的であり、過大評価はできないが、軽視もできないというものであり、何よりも事実を明らかにすることが大切であるというものである。

ところで、この戦争へのタゴールの見解はどのようなものであったのか。⁽¹¹⁾

インドの著名な物理学者で、自然科学の分野ではタゴールの師でもあったジャガディッシュチャンドラ=ボースは、タゴールとともに「インド人がヨーロッパ人よりも劣等である」という西欧におけるインド（人）観を論破した人物である。その彼がボーア戦争の最中（1900年の8月？）ロンドンよりタゴールに差し出した手紙には、「私が行う仕事に対して同胞は誰一人として助けてくれないので絶望状態にあります。あなたの気の毒なチャンピオンは、ほとんど最後のあげきに等しい状況にあります。それでもあなたは、彼が戦いから逃げないと確信しているにちがいない

ません」と書かれているが、「あなたの気の毒なチャンピオン」とは誰のことであろうか。

1900年5月よりロバーツ最高司令官の率いるイギリス軍が大攻勢に出て、6月にはロバーツがトランスヴァール共和国の首都プレトリアに入城し、7月にはボーア人のゲリラに対する焦土作戦も開始されていた状況を背景に書かれた文面であるから、それはボーア人あるいはトランスヴァール共和国のことなのであろうか。それともボースその人のことなのか。この謎解きの鍵は9月17日付けのタゴールの返書に見いだされるであろう。

「私が静かにフランス語の文法書のページをめくっている時に届いたあなたの手紙は、電流で感電死した蛙のように興奮で身震いさせました。ロケン〔ロンドン留学以来の親友〕とスレン〔タゴールの甥〕に手紙を見せたいとうずうずしましたが、あいにく彼らは二人とも遠くに掛かっていたので郵送しました。

もちろん戦いを宣すべし！降伏してこれないような不幸でみじめな連中(wretch)を誰一人として容赦してはならない。ロバーツ卿のように無慈悲にやればよいのです。あなたの論議の論理に基づいて不幸でみじめな連中を故郷の土地（ホームグラウンド）に倒しなさい。

あなたが召集された歩兵中隊からはるか遠ざかるという戦略を展開した方法から、あなたがクリスマスにはプレトリアにいるものと確信しています。そしてその後に勝利があなたと我々のもの——すべてのベンガル人のものになるとき、名譽と栄光を分かち合うでしょう。私たちは、あなたの行ったことを理解する必要もないし、思想も、時間も、金も、与える必要はないでしょう。けれども、勝利のときに『タイムズ』のなかに称賛のコーラスを聞くことになるでしょう」。

手紙の断片的な引用なので分かりづらい箇所がいくつかあるが、「気の

毒なチャンピオン」とはボースのことを指している。そして当時国際世論で話題になっていたボーア戦争は、比喩の道具として用いられているに過ぎない。それでも、「無慈悲なロバーツ」という表現からはタゴールがゲリラ戦や焦土作戦の犠牲になったボーア人に同情的であったことを伺わせる。けれども、そのスタンスは、イギリス帝国の一員としてのインドというものではなかろうか。それは、単にタゴールがヒューマニストであったという一般論からではなく、南アフリカ情勢に関するガンジーとの共同歩調という点から証明されるように思う。

ガンジーは、ナタールのインド人社会で影響力をもっていた人たちを「正義は疑いなくボーア人側にあるが、現在はイギリス帝国内における自由を追及する絶好期であるからイギリス側を支援しよう」と説得し、ナタールで「自由インド隊」を組織している⁽¹²⁾。つまり、ガンジーは、ケープよりもトランスヴァールの方が人種差別が厳しいことを認識していたためと、本国イギリスにいわば貸しを作るという意味からも、インド人の解放、自由の獲得のためにイギリスに協力する戦術を選択したが、ボーア人の共和国が独立を求めて戦っている理由に正義があることは承知していた。タゴールのボーア戦争に対する立場は、基本的にガンジーのものと同じであった。

詩人であるタゴールは、当然のことながら詩によって自己表現を行っている。正面からアフリカをテーマにした詩は、エチオピア戦争の勃発した1935年の作品があるが、ここに一部を紹介する「世紀の日没」というタイトルのベンガル語の詩は、ボーア戦争と関連するもので、まさに19世紀が幕を閉じた1900年12月31日に作られた。

[19] 世紀の太陽が血の雲の中に今日沈まんとしている

憎むべき今日の祭りに

ガチャガチャという武器の音は死のたけり狂った恐るべき音をたてている

恐怖に気づきながらも、詩人の一般大衆は悲しげな遠吠えをあげている

燃えている地面で喧嘩をしている駄犬⁽¹³⁾の歌が

解釈するまでもないと思うが、“遠吠えをしている詩人の一般大衆”とはタゴール自身のことであり、愚かしい戦争をやめさせることのできない自分の無力さを嘆いているが、彼のペン（詩）の力が無力であったとはいえないであろう。

「このような詩をタゴールに書かせたのは、ボーア戦争と中国における義和団に対する弾圧行為であった。また、タゴールよりも数年早くにノーベル文学賞を受賞し、ボーア戦争を含む帝国主義戦争にイギリスの若者たちを駆り立てる詩を多く残したラディヤード=キップリングに対する反発の気持ちからであった」とのクリシュナ=グッタの指摘は適切であると思う。

日本のタゴール研究者大類純の論文にも次のような指摘が見られる。⁽¹⁴⁾

「1900年に発表された世に名高い二つの短詩の中で、タゴールは帝国主義戦争の時代感覚を表現し、敵対して競争する帝国主義者の利益闘争が着々と進行中であること、弱肉強食の略奪的国家主義が文明を難破させようとしていることを警告した」。

3. タゴールとエチオピア戦争

タゴールとファシズム

日中戦争が勃発した1937年にタゴールが日本の中国侵略を痛烈に非難

して、親友の野口米次郎らと絶交したことは比較的知られているが、エチオピアを侵略したイタリア・ファシズムに対しては、いかなる態度をとっていたのであろうか。

インドのタゴール研究家で『タゴール—ひとつの研究』と『近代インド文化』の著者ムケルジーは、後者の中で「世界観が唯物論とヒューマニストという二つに大別されるとき、もちろんタゴールの世界観は後者に属する」として、国家権力に対する強い批判精神に欠けていたり、経済的な分析や批判を伴わないヒューマニストの欠点をタゴールが共有していたと指摘した後、晩年（遅くとも78歳）のタゴールの歴史的危機意識の把握での発展を「森のメッセージ」と Kalantar（「危機」——1941年刊行の英語の評論「文明の危機」と同一趣旨のものか）を比較してそのダイナミックな変化に目を見張り、「晩年におけるイギリス帝国主義への非難は、彼の初期の弱点を十分にカバーしたように思う」と記している。⁽¹⁵⁾

同じような指摘を大類純もしている。⁽¹⁶⁾

「彼〔タゴール〕が感じとったファシズムの上昇は、“文明の危機”を信号したし、病床にあった彼をして世界最大のヒューマニストのチャンピオンとして、彼のたどり着いた最も高貴な精神的成長にまで高めしめた。……………彼の詩は急に“蛇（ファシズムと帝国主義の）が各方面に吐きかけた毒気を含んだ息”を熱烈に非難しはじめた。……………78歳の誕生日に次のように宣言した—この世を去る前に宣言しよう。途方もない連中のこの愚かな賭博と冒瀆は、歴史に残る永遠の一章となることは決してないであろう」。

1930年代後半のタゴールの政治的、思想的立場についてムケルジーはこう結論している。

「タゴールの反対物は、イギリスの〔ネヴィル〕チェンバレンであり、

ドイツのヒットラーであり、イタリアのムッソリーニである」、[「タゴールは」機械文明、食欲とナショナリズムとの関係を見た最初のインド人であり、マルクス主義を通してではないが、インドにおける最初の反ファシストである」]。

もちろん、タゴールの反対物には日本軍国主義もあったし、野口との絶交よりもずっと以前 [1925年] に日本が西洋から借用した暴力的ヒステリーを行使して東アジアを中心とする東洋の覇者になろうとしていることを憂えていた。けれども、1922年にイタリア・ファシズムが権力を掌握した直後からタゴールは、反ファシストであったのであろうか。少なくとも、タゴールの甥スレンや長兄の孫でベンガル労働党書記長になったサウミエーンデラナート、あるいはコミンテルンで華々しく活動した M.N.ロイのようなマルクス主義者の方がタゴールよりも早くに反ファシズムを主張し、その運動を実施していた⁽¹⁷⁾と思う。

また、タゴールがヒットラーのナチズムに対して、その反ユダヤ主義には疑問を抱きながらも最初はいまいな態度を採っていたことは事実である。1933年11月にサウミエーンデラナートは、「あなたは、イタリア・ファシズムに対して反対表明をされています。もし、その見解を改められていなければ、ドイツのファシズム——今ではナチズムと呼ばれているものを支援できないはずです。世界の至るところから賢者が声を大にして声明を発しています。あなただけが沈黙を続けています」との手紙をタゴールに書き送った。タゴールは、この手紙の影響からよりもむしろユダヤ人の物理学者アインシュタインの亡命への衝撃から反ナチスの立場を鮮明にしていった⁽¹⁸⁾。

78歳=1938年にタゴールを反帝・反ファシズムにさせた背景としては、日中戦争、スペイン戦争、ナチスによるユダヤ人迫害とともにエチオピア戦争への怒りが考えられる。この点に関連して、大類は「アヘン戦争

の非道さは、1881年以来、若きタゴールの怒りを激発させ、シナ、朝鮮、エチオピア、コンゴ、アメリカ・ニグロあるいはスペイン共和国の圧迫であるにせよ、彼は最後の息を引き取るまで自由と権利への主張を高く掲げることをやめようとはしなかった」と述べている。⁽¹⁹⁾

タゴールとファシズム下のイタリアとの関係に話を戻そう。タゴールがはじめてファシズム下のイタリアに足を踏み入れたのは、1925年1月の南米からの帰路であった。当初は数週間の滞在予定であり、当然アジアで初めてのノーベル賞作家の講演も予定されていたであろうが、3年の海外滞在の疲労が蓄積していたので急遽帰国することになった。この時点でのタゴールは、タゴール崇拜者のミラノ侯爵で歴史家でもあったガララッティ＝スコッティ（ロマン＝ロランによれば「イタリアでタゴールを取り巻いていた人々のなかで唯一の反ファシスト」）との交流からファシズムの残虐性を聞かされたり、ファシストの出版物に彼に対する一連の批判記事を見い出してファシズムへの嫌悪感を強めた。また、翌年にタゴールがイタリアを再訪した折りに、ムッソリーニがタゴールを見張らせるためにミラノのホテルにある女性を派遣していたとタゴールが回顧している。

それにもかかわらず、タゴールと彼の創設した大学への援助をムッソリーニに嘆願していたローマ大学のサンسكريット語教授フォルミッキが客員教授としてタゴールのもとを訪ずれた際に、タゴールは、イタリアの古典の貴重書を土産として持参したことへの礼状をムッソリーニに出した。それに対して、アジアで最初のノーベル賞作家に会いたがっていたムッソリーニは、「インドとイタリアの文化関係に再び花を咲かせるために」という理由によりタゴールを招待した。

かくて、1926年5月下旬から6月22日にかけてタゴールは、ローマやナポリなどを訪問した。もちろん、ローマで開かれた講演会にはムッソ

リーニも列席した。また、タゴールは、ファシストの機関紙『トリビュナ』のインタビューに応じてムッソリーニの知性と力を褒めたが、ファシズムそのものについての論評は回避していた。ロマン=ロランの日記によれば、タゴールの談話は、フォルミッキによって歪めて公にされていたが、儀礼的な会見でタゴールは、ムッソリーニの外貌に打たれ、愛情のこもった非常に人間的な微笑を見だしていたようだ。(['全集』31、99頁)。

けれどもイタリアから帰国後の1926年7月に発表した評論でタゴールは、「ファシズムは、究極(最高)のヒンズー正統派の教義のまさしく反対物」と明確に規定した。ヒンズー正統派とは何かをここで説明する余裕も能力もないが、タゴールの一族が熱心に信仰していた神像を家中に祭るヴィシュヌ派もヒンズー正統とよばれていたが、1828年に近代化の中で設立された偶像崇拝を排した「梵教会(ブラマ・サマジュ)」の流れを汲み、世界平和のための宗教をめざしていたヒンズーのことを指しているものと考えている。タゴールが1902年に東亜仏教者大会をインドで開催しようとしていた天心を支援したということも「梵教会」の設立の精神——ゾロアスター、キリスト教、イスラームをも受け入れられる教義を採用し、ヒンズーを世界宗教とした——と関わるように思う。つまり、大目標のためには排他主義は採用しなかった。

ムッソリーニの招待がタゴールの反ファシズムの立場を鮮明にさせたのは、なんとも皮肉なことであった。3週間以上のイタリア滞在中に、タゴールがファシズムの正体について見聞きしたことはけっして少なかったが、ここではひとつのエピソードのみを簡単に紹介しておく。すなわち、タゴールと歴史家クローチェとのローマでの密会についてである。

クローチェが中心になって1925年に公表された宣言文は、「ムッソリー

ニ政権の下で第一次大戦以前に存在していた自由主義国家イタリアは完全に葬り去られた」と高らかに謳っていた。この年から1943年まで彼の発行していた『クリティカ』と彼の著作は、反ファシズム知識人にとって輝ける灯台であった」と言われているが、タゴールが一番イタリアで会いたかった人物こそは、ルネッサンス期を中心にイタリア文化の輝かしい歴史を叙述していたクローチェであった。ムッソリーニは「クローチェはローマにはいない。私は彼の居所を知らない」と語ったが、「イタリア思想の最高の生きた化身といわれているクローチェに会わずに帰国できない」とタゴールがいうと、フォルミッキ教授に「会見のアレンジをなさい」と命令した。かくて、当時ナポリで自宅拘束中のクローチェを密かにローマに連れ出して二人の密会がお膳立てされた。タゴールの息子の日記によれば、両者の会話ではファシズムに言及されることはなかったという。ロマン・ロランも、「クローチェは“主”の命令でやって来た。そして彼は黙っていた。彼は知性に関することしかタゴールに語らなかった。彼の反ファシズムについては、タゴールは何も知ることができなかった」と記している。(『ロマン＝ロラン全集』31、100頁)。

タゴールとエチオピア戦争

タゴールの反ファシズム、反戦・平和の活動について論じるには、ロマン＝ロランやアインシュタインらとの交友関係をたどらなければならないが、ここではエチオピア戦争関連での詩人としての彼の活動についてのみ紹介するに留まる。

ムッソリーニ下のイタリアがエチオピア侵略をスタートしたのは、1935年10月初めのことであるが、タゴールが初めてアフリカを題材とした詩を創作したのはこの出来事と関わりがあるはずである。つまり、エチオピア侵略開始からさほど遠くない日で、英訳された詩が発表された

1936年5月以前に創作されている。幸いにも『タゴール著作集』の詩集部分は、年代順に整理されているので比較的容易にベンガル語によるオリジナルの発表時期が判明した。詩集『木の葉の皿』の第16歌が英詩と符合したが、これにはベンガル暦で1343年マグ月28日と日時が記されている。これを西暦に置き換えると1936年2月中旬となる。少し長い引用になるが、この詩の邦訳を紹介しておきたい。

かの原初の混沌の時代に

創造主が 自分の仕事のそれぞれが気に入らず
新しく創ったものを くりかえし うちこわし、
苛立って なんども 首をふったとき、
荒れ狂う海^{かいな}の腕が
東方^くの陸の胸ふところから
アフリカよ、おまえを奪い去り、
鬱蒼^{うつそう}たる大樹に見まもられた
昼なお暗い森の奥に 閉じ込められた。
そんな孤独な侘び住まいのなかで、おまえは
未知なるものの神秘を集めて、
海や陸や空の不可解な表象^{しるし}を解きあかした、
目には見えない自然の魔力が
おまえの意識を超えた心のなかで目を覚ました。
醜悪を装って おまえは
恐怖を嘲弄し、
脅威の角笛の音で
自らを野蛮へとかりたてて
恐怖を乗り越えようと試みた。

おお、陰におおわれたものよ、

黒いヴェールのもとでは

おまえの人間らしい美^{やま}しさは

不純な軽蔑のまなざしには映らない。

鉄製の手枷をたずさえ

人狩りどもがやって来た、

彼らの爪は おまえたちの狼の爪よりも鋭く

彼らの驕^{おご}りは おまえたちの陽ひのささぬ森^{ジャングル}林よりも暗かった。

文明の野卑な欲望が

その破廉恥な非人間性を露にした。

おまえの声にはならぬすすり泣きのなかで 涙にぬれた森の小径が

おまえの血と涙で ぬかるんだ。

盗賊たちの鋌つき靴の底で踏みにじられた

ぶざまな泥のかたまりが

おまえの屈辱の歴史に 消し去りがたい足跡を残した。

海の向こうでは 同じ瞬間^{とき} 町々や村々で

朝な夕なに 愛の神の御名によって

教会の祈りの鐘が鳴り響いていた。

幼子は 母の膝で遊び

詩人の歌には

美への頌歌^{ほめうた}がこだました。

今日 西の地平^{かた}の方で

夕べが 烈しい風雨に息づまるとき、

洞穴から 獣たちが 這い出て

無気味な声で 時代の終わりを告げるとき、

来たれ、新しい時代の詩人よ、

迫りくる黄昏の最後の光をあびて

あの辱められた女の戸口に立って

一言^{ひとこと}教しを求めよー

血まよう狂気のただなかで

その一言をもって おまえの文明の最後の聖きことづてとするのだ。

アフリカを題材としているが、殊に後半の一節は、ヨーロッパ近代文明の危機を憂えていることが察せられる。つまり、35年前に「世紀の日没」を書いたときに危惧していた来るべき20世紀に対するタゴールの不安は、第一次世界大戦、世界大恐慌に続くファシズムの台頭によりいよいよ深められていたことが、「時代の終わり」とか「文明の最後の聖きことづて」という表現に表されていると思う。けれども前半部分は、奴隷貿易から帝国主義時代に到るまでのアフリカの屈辱の歴史が謳われている。そしてここでは「インド」と題する詩において愛国心とともに示されたタゴールの高いヒューマンイズムの精神や国際主義が反映されていると取るのは身びいきすぎるであろうか。

「海の向こうでは」の節にあっては、アフリカの犠牲によってヨーロッパの平穏な生活が保証されたことを簡潔に表現している。この部分について解題の著者は「虐げられた民族の詩人だからこそ語りうる」と評している。

そして私には、エチオピアがファシスト軍隊に傷つけられている現実とともに、エチオピア侵略直前のムッソリーニの演説（初めてイタリアの津々浦々で放送され1000万人以上が聞いた演説で世界中に報道された）がこの詩を書こうとタゴールを駆り立てたように思えてならない。

そう思わせる部分を中心に演説のほんのさわりを紹介しておこう。⁽²²⁾

革命的黒シャツ隊の諸君！すべてのイタリアの紳士・淑女よ！山の向こう、海の向こうの世界中のイタリア人諸君よ！聞きたまえ！

われわれはアドワ⁽²³⁾から40年間に耐え忍んできた。もう堪忍袋の緒が切れた。国際連盟は、イタリアの正当な権利を認める代わりにわれわれへの制裁を話し合っている。⁽²⁴⁾真のフランス国民がイタリアに対する制裁に協力するとは信じがたい。イギリス国民が文明化された人々の場所を奪ったアフリカの国を守るために血を流したり、ヨーロッパに激変を望むとは考えられない。

要するにムッソリーニは、野蛮からヨーロッパ文明を守るためにエチオピアを侵略するのだと主張しているのである。それに対してタゴールは、イタリア・ファシズムこそがヨーロッパ文明の破壊者であることを暗に訴えたのである。さらに彼は、キップリングの「白人の重荷」に典型的に見られる社会進化論の延長線上にある“文明の使命論”のまやかしは見抜いていたが、アフリカ（エチオピア）独自の文明の擁護という域にまでは到達していなかった。この点はエチオピアを支援したアフリカの知識人たちとは大きく異なる点であった。けれどもタゴールと彼らとの間には、ロンドンとその周辺で交流があったことが十分に推測される。その糸口になったのがこの詩の発表であった。

この詩は、『世紀の日没』と同じくベンガル語から英語に訳され、英訳は Spectator の 5 月 7 日号に掲載されたが、その経緯にひとつのエピソードがある。タゴールは、オックスフォードに住んでいたアフリカの王族の一人に彼の新作を英語に訳して聞かせたところ、「もし私のアフリカの友人たちにこの詩を知らせられるならば、十分な償いができると感じ

られるでしょう。そしてインドの一詩人が文明の名における（アフリカ大陸の）全大陸の略奪をどのように思っているかを彼らに分からせましよう」とその王族が語り、英訳の公表が実現したのだ。⁽²⁵⁾

1936年10月にブリュッセルで開催された国際平和会議に、タゴールは、彼の国際関係の哲学の表明ともいえるメッセージを寄せているが、もちろんそのなかでエチオピアの状況への言及が見られる。

平和というものがただ単に戦争が存在しないという状態以上のものであろうとするならば（絶対平和のこと）、それは弱者の退屈 weariness ではなく公正な人々の強さによって築かれなければならない。アビシニアにおける平和の悲痛なうめき groan は、スペインにおける戦争のわめき声 howl に劣らず身の毛をよだたせるほどぞっとするものである。もし真の平和に向かって努力するのであれば、ある民族の満足は、他の民族の落胆によっては達成されないのである。⁽²⁶⁾

毒ガスを用いたイタリアは、1936年5月にエチオピアの首都アジスアベバを陥落させ、入植政策を導入した。そうしたなかでエチオピア人の抵抗が続けられていた。⁽²⁷⁾ 他方、同年7月には、土地改革をはじめとする多くのスペインの民主化の試みに着手した政府に対する反乱が開始されていた。

結びに代えて

「はじめに」に記したように、「タゴールとアフリカ」というテーマで括って見ることで、今までのタゴール研究では断片的にしか扱われず見えにくかった部分が少しは見えたと感じる。けれども、南アフリカにおけるタゴールとガンジー同様に、二人が意見対立した後の1930年代に

エチオピア支援を共有したことについては指摘できても、コミンテルンとの関係——インドにおける共産主義運動に対する立場の違いについては立ち入れなかった。

要するに、タゴールのようなグローバルな思想家で、根底にあった思想基盤は普遍的であっても時代状況によっていわば世界観に（進歩という語では片付けられない）変容を伴っていた思想家を扱うには、アフリカという一地域を抽出するだけでは見えてくるものは少ない。ただ裏を返せば、今まで正面からばかり見てきて背中のある部分が死角になっていた。この小論における筆者の試みは、死角を除去することであったが、まだ推測の域を出ていない部分が多いので、今後は実証できるところは実証していきたい。

最後に今後取り組んでいきたいテーマをアトランダムに列挙しておくので、インドやタゴール研究者はもとより、関連の研究をされている方やテーマに関心のある向きの方からなにかと御教示いただければ幸いである。

1. ジャワ紀行、ペルシア紀行やインド論などで展開している非ヨーロッパ近代文明社会に対するタゴールの理解の仕方について
2. ソ連紀行を中心とするタゴールの社会主義・共産主義観について
3. 反ファシズムを中心とする平和運動について
4. タゴールの日本観・東アジア観について

その他にも小ささまざまなテーマが頭に浮かんでくるが、ほかにメインの研究分野をもっている人間が合間をみて調べるといのはおこがましいし、実行できないであろうからこの4点に留めておきたい。

註

- (1) 岡倉登志「二つのエチオピア戦争と日本—大アジア主義者を中心に—」、『東洋研

- 究』122号、1996年12月、1～24頁。二つのエチオピア戦争に関しては『二つの黒人帝国』、東大出版会、1987と『エチオピアの歴史』、明石書店、1999参照。
- (2) ビハリ=ボース『インドの叫び』、三教書院、昭和13年、5頁。訳者名なし。なお『印度は叫ぶ』と改題して昭和17年にも刊行されている。
- (3) 『タゴール著作集、第十巻 自伝・回想・旅行記』、第三文明社、1987、467頁。
- (4) タゴールも H. スペンサーの『音楽の起源と機能』を読んで、感情が言語に音楽的な抑揚を与えることを知り、自作の舞台で実験をした。『タゴール著作集、第十巻』、第三文明社、1987、575～6頁。
- (5) 大類純「タゴールの文学における愛と人間像」、『タゴール生誕百年祭記念論文集』タゴール記念会発行、1961、85頁。
- (6) 春日井真也「シュヴァイツェルの理解するタゴールの思想的立場」、『前掲書』、181～205頁参照。
- (7) Krishna Dutta & Andrew Robinson, *Rabindranath Tagore*, London, Broomsbury, 1995.
- (8) *Ibid.*, pp.196～197. ガンディーは、1914年に南アフリカの彼の道場^{アシュラム}を閉鎖していた。1931年にタゴール生誕70周年記念の Golden Book が刊行され、日本からも野口米次郎、武者小路実篤らが寄稿しているが、ガンジーの祝辞文のなかには、南アフリカより帰国した子女の面倒を見てもらったことへの感謝の気持ちが述べられていた。(*Ibid.*, p.304～5)。最新のガンディー伝には、「(1915年に帰国した)ガンディーは、アフリカからつれてきた家族たちを自分の道場アシュラムができるまでタゴールの作ったシャンティニケートンの林間学校に一時滞在させてもらっていた」と記されている。(長崎暢子『ガンディー』、岩波書店、1996、118頁)。
- (9) 『タゴール著作集、第十巻』、370～371頁。
- (10) 木畑洋一「支配の代償」、東大出版、1987、38頁、秋田茂「第二次ボーア戦争とインド」、『西洋史学報』(広島大) 復刊19、1992。
- (11) 以下の記述は、Krishna Dutta & Andrew Robinson, *op. cit.*, pp.128～129, 402に依拠している。
- (12) 南アフリカ戦争の総合的な研究として評価されている Peter Warwick (ed.), *The South African War*, London, 1980, p.191を参照したが、同様の記述は、ガンジーの著作や伝記類にも見られる。
- (13) Krishna Dutta & Andrew Robinson, *op. cit.*, p.129引用の英詩より拙訳。
- (14) 大類純「前掲論文」、86頁。
- (15) D.P. Mukerjee, *Modern Indian Culture*, Calcutta, 1948, pp.126～35の要約引用。坂本徳松「タゴールとアジア・ナショナリズム」、前掲の『タゴール生誕百年祭記念論文集』、251～3頁参照。

(110)

(16) 大類純「前掲論文」、87頁。

(17) J.P.ヘイスコックス著、中村平治・内藤雅雄訳「インドの共産主義と民族主義」、岩波、1986参照。

(18) Krishna Dutta & Andrew Robinson, *op.cit.*, p.344, p.436. タゴールがアインシュタインに初めて会ったのは1926年のことであり、以来二人の友情はタゴールが死ぬまで終生続いた。

(19) 大類純「前掲論文」、85頁。

(20) 以下のイタリアとタゴールとの関係の記述は、Krishna Dutta&Andrew Robinson, *op.cit.*, pp.266~273, 438~440に主に依拠しているが、宮本正清訳『ロマン・ロラン全集』31、みすず書房、1958年、95~100頁、115頁および『ロマン・ロラン全集』35、1962年、280~283頁も参照。

(21) 「タゴール著作集第2巻」、1986の森本達雄訳を引用しているが、*Ibid.*, p.345の英訳と我妻和男訳（『タゴール』、講談社）の一部を参照。なお、セネガル初代大統領で詩人のサンゴールや黒人解放運動の戦士であるアフロー・アメリカンの詩人ラングストン=ヒューズも、エチオピア戦争をテーマとした詩を創作している。

(22) この演説は英訳、仏訳などが数多く見られる。邦訳も幾つかある一たとえば、フェルミ『ムッソリーニ』一が、ここでは Verich, *European Powers and the Italo-Ethiopian War*, (出版社名なし), Salisbury, 1980, p.31より訳した。

(23) イタリアがエチオピア侵略に失敗し敗北を喫したアドワの戦いのこと（『二つの黒人帝国』、180~190頁参照）。

(24) イタリア領ソマリアとエチオピア帝国国境線付近で起きたワルワル事件のこと。

(25) Krishna Dutta & Andrew Robinson, *op.cit.*, p.345, p.457. 残念ながら an African prince とあるだけであるが、1936年にエチオピア皇帝ハイレ=セラシエー族がロンドンに亡命した後にエジプトやエチオピアから prince たちがイギリスにやって来た。「十分な償い」という表現から、戦火から逃れて同胞を危険なままにしている自分を責めているととるならばエチオピアの王族である可能性が高い。なおインドにおけるエチオピア戦争への関心は、1936年にディリー・ニュース・プレスが『イタリアとアビシニア（エチオピアの別名）1891—1935』を刊行したことにうかがえる。

(26) Modern Review, *op.cit.*, 1936, p.442; *Ibid.*, p.345にも引用。

(27) 拙稿「イタリア占領前半期のエチオピア」、『駿台史学』、80号、1990年10月および『エチオピアの歴史』、231~8頁参照。